対　談

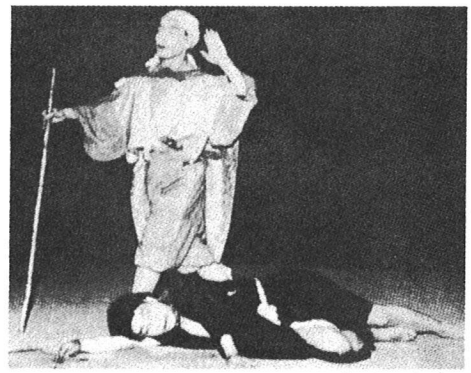
石井漠を語る

石井みどり・郡司正勝

約一時間にわたる両氏の対談は，郡司氏により冒頭にだされた「今のモダンダンスとの違い」，即ち漠の踊りは非常に日本的で，土俗的，地に足がついたものであるとの指摘から始まり，これが中心のテーマとなった。みどり氏はこれに対し，漠の舞踊は「根本的に動き」であり，いつも「新しい動きを考えろ」と言っていたこと，そして音楽を大摑みにし，間を大切にしていたこと，の2つを上げた。「非常に東北的な，丸太を転がすようなはっきりとした力強いリズムを感じますし，さっと動かずに気持ちの“ため”から動く」「先生は音の“間”を意識して全体を把握されるし，“1”を摑まずむしろワンテンポ下がって音楽をとらえるんです」といった言葉は，実際に漠の作品を踊ったみどり氏ならではのものであった。そして，漠が作品上演に関しては，まず一般の人の理解を深めることを考えたといった，漠のパイオニアとしての責務の認識といったことにも触れられた。

また，「漠先生はどもられて，怒る時は凄いんですよ。振付で『右を向け』っておっしゃるから右を向いたら次の日は『なぜ右向いた！』って怒るんです。」「やれ『トンカチもってこい』だの『お茶もってこい』だの，ほんと我侭なのが先生でした。でもその我侭がなくなったら先生の創作も舞踊もなくなってしまうと思いました。」「私がなんかやった動きを『おもしろいからもう一度やってご覧』っていって，そしたら『ちょっと美笑子（註：石井美笑子氏）呼んでこい』『おい寒水（註：寒水多久茂氏）呼んでこい』で，できたのが《プリズム1933年》なんです……先生はその人を見て，その人の良さを知り，また良さを最大限に引き出すことが本当に上手でした」など，次々と語られるみどり氏の言葉からは，人間「漠」を垣間見ることができる。

その他，漠を始め，江口隆哉，藤蔭静枝，五条珠実，土方巽等，日本の舞踊の担い手の多くが東北出身であること，坪内逍遙が晩年に「歌詞のない舞踊を創るとよかろう」と提案しているのは漠の影響ではなかろうかという推察など，郡司氏から非常に興味深い意見も提出された。

全体として，対談は郡司氏の軽妙な質問に対し，みどり氏が身振りをまじえながら「生きた」言葉で語り，答える形で進められ，日本人の舞踊を目指した漠の作舞の特徴と，人間としての漠，そして当時の舞踊界の状況を伺うことができた有意義な一時であった。　　（文責　細川江利子）

＊1989年度秋季第28回舞踊学会
『舞踊學』13－1号より転載